アンリ・マティス
――切り紙絵とヴァンスのロザリオ礼拝堂

国立新美術館主任研究員 米田尚輝（よねだ なおき）

アンリ・マティス（1869～1954）は北フランスで生まれ、パリでしばらく活動した後、1917年に南フランスのニースへ赴いた。マティスはこの地でアパルトマン兼アトリエを転々としながら制作に励む。最終的に落ち着いたのはニースの小高い丘に位置する高級ホテル・レジナ館で、ここが彼の終の棲家（ついのすみか）となる。部屋にはモンステラなどの巨大な観葉植物、小鳥たちを飼うための鳥籠、そして自ら骨董品屋で収集した家具調度品などの数多くのオブジェが置かれていた。大きな窓から日が差し込むこの部屋で、病気のため自由に動けなくなったマティスは、アシスタントの力を借りながら精力的に制作に励んだ。

こうした環境の中でマティスが積極的に用いた技法が「切り紙絵」である。彼は色が塗られた紙をハサミで切り取って様々な形を生み出し、それら切り紙の断片をアシスタントに部屋の壁面にピンで留め

アンリ・マティス《ブルー・ヌード Ⅳ》1952年

させて大スケールの構図を考えた。有名な切り紙絵の連作〈ブルー・ヌード〉のいくつかもまた、このようにして壁面で構想されたことは、残された写真が教えてくれる。この時期、マティスのもとには大型装飾の依頼が舞い込んでいた。ロサンゼルスのコレクター夫妻から別荘の中庭に設置するための陶板による大型装飾を依頼されたマティスは、それに応じて切り紙絵でその構図を4点こしらえた。そのうちの1点が、ニース市マティス美術館所蔵の切り紙絵

ヴァンスのロザリオ礼拝堂（内観）

による大作〈花と果実〉（1952～53年）である。マティスはその他3点の構図とともに、この大作も高い天井をもつレジナ館のアトリエで練り上げた。

またマティスはニースの戦禍を逃れて近郊の小さな町ヴァンスに赴き、「ヴィラ・ル・レーヴ（「夢」荘）」と呼ばれたアパルトマン兼アトリエにしばしば滞在した。そのごく近くでドミニコ会の礼拝堂を建設する計画が持ち上がり、宗教芸術に新しい風を吹き込もうとしていたクチュリエ神父とレシギエ修道士はマティスに助言を求めた。これに応じたマティスは、鉄筋コンクリートの仕様を推し進めていた建築家ペレとともに建設計画を進めた。こうして完成した礼拝堂を訪れた人がとりわけ目を見張るのが、ステンドグラスと陶板壁画で構成された室内装飾である。マティスはステンドグラスの図案「生命の木」を切り紙絵によるマケット（試作のためのひな型）をもとに考案するとともに、陶板壁画「聖ドミニクス」「聖母子」「十字架の道行」の図像を筆によるデッサンで描いて白いタイルに焼き締めた。また、これらの室内装飾のほか、キリストの磔刑像や、司祭が身につける祭服と装身具一式に至るまで、この礼拝堂に関わるほぼ全てのデザインを指揮したのである。マティス自身が「全生涯の仕事の到達点」と認めるように、ある種の総合芸術作品であるヴァンスのロザリオ礼拝堂は、彼にとって最晩年の最高傑作だといってよい。

Essay 時の調べ

略歴

著書に『アンリ・マティス作品集　諸芸術のレッスン』（東京美術、2023年）。企画担当展に「マティス　自由なフォルム」（2024年）、「李禹煥」（2022年）、「話しているのは誰？　現代美術に潜む文学」（2019年）、「サンシャワー：東南アジアの現代美術展　1980年代から現在まで」（2017年）など

作品詳細

アンリ・マティス《花と果実》1952-1953年　切り紙絵　410×870㎝　ニース市マティス美術館蔵　©Succession H. Matisse　Photo: François Fernandez

アンリ・マティス《ブルー・ヌード Ⅳ》1952年　切り紙絵　103×74㎝　オルセー美術館蔵（ニース市マティス美術館寄託）©Succession H. Matisse　Photo: François Fernandez

ヴァンスのロザリオ礼拝堂（内観）　©Succession H. Matisse　Photo: François Fernandez

アンリ・マティス《花と果実》1952-1953年

展示情報

マティス　自由なフォルム
会場　国立新美術館（東京都港区六本木7－22－2）
会期　2024年2月14日（水）～5月27日（月）
火曜休館